

## 令和3(2021)年度 第63回卒業式式辞

駒場東邦高等学校第63回生諸君、ご卒業おめでとうございます。

また、同時配信を通してご参列いただいております保護者ならびにご家族の皆さまには、ご子息の晴れの門出にあたり、お喜びも一入のことと拝察いたします。

本日は、関係の皆さまのご理解をいただきまして、コロナ禍がまだまだ予断を許さない状況ではありますが、卒業生諸君がこうして一堂に会しての卒業式を挙げる運びとなりました。感染拡大防止のため、PTA会長、邦友会々長をはじめとするご来賓の皆さま、また、学校法人東邦大学の理事長をはじめ各部署の代表の皆さま、そして何より、諸君の保護者ご家族の皆さまにご臨席いただけないことは、大変残念なことです。これらの皆さまは、言うまでもなく諸君の卒業を心から喜び、諸君のこれからの歩みに期待をもって注目していらっしゃいます。その祝意を共に感じながら、この大事な卒業式を進めてまいりたいと思います。

諸君に言葉を贈るにあたり、まず、私が好んでいるイギリスのある古い歌の歌詞をご紹介します。『サリーガーデン』というこの曲の歌詞は、19世紀アイルランドの詩人イェーツが、一人の田舎の農婆がいつも口ずさんでいた民謡に感激し、その断片的な詩句を整えて自らの詩集に掲載したことで、世に知られることとなりました。

Down by the salley gardens  
My love and I did meet;  
She passed the salley gardens  
With little snow-white feet.  
She bid me take love easy,  
As the leaves grow on the tree;  
But I, being young and foolish  
with her did not agree.

In a field by the river  
My love and I did stand  
And on my leaning shoulder  
She laid her snow-white hand.  
She bid me take life easy,  
As the grass grows on the weirs;  
But I was young and foolish  
And now am full of tears.

『サリーガーデン』は訳すと「楊の林」となり、これはアイルランドの田園風景には古くからよく見られたものであるようです。歌詞の大意は次の通りです。——楊の木の茂るあたりで、僕は彼女と出会った。白い雪のような手足を持つ彼女は、優しく僕に言った。「愛を気楽に考えて、木の葉が茂るように。人生を気楽に考えて、川のほとりに草が茂るように。」でも若く愚かだった僕は、その言葉に背くことができず、今は涙にくれている。——つまりこれは、青春の日を後悔をもって顧みている歌なのです。

先ほどお渡しした卒業証書には、「業を卒えたり」と記してあります。助動詞「たり」は、これまで為されてきた動作の結果が存続することを示すので、卒業証書のメッセージは、「君は、ここで成し遂げたものをこの先変わらずに持ち続けるのだから、自信をもって進みなさい」ということになるのでしょうか。もちろん、意欲的に取り組んで、充実した学びの成果を得たと思えているならば、それは掛け値なしに素晴らしいことだと思います。しかし、何十年か前の私自身を振り返ってみるに、「成し遂げた」という感覚にはとても及ばぬものであったと言わざるを得ません。何とも中途半端で、思い残したという感覚に捕らわれながら、それを直視することもできないので、表向きだけ熱くやり切ったかのようなポーズをとっていたように思います。そして、新たな道に踏み出すことに少しのためらいを覚えながら、何とか心に区切りをつけてその場を立ち去った、それが私の「卒業」のイメージなのです。

先ほど紹介した『サリーガーデン』は、そんな私の気分をよく反映しています。卒業に際して輝く前途を祝う歌ではないので、君たちには甚だ失礼にあたるのかもしれませんが、そこはご容赦いただきたいところです。しかし、この歌に表現された“思い残した”という感覚は、特にこの先行き不透明で不安に満ちた時代にあって、人生の節目を迎える際にと

ても大事なことを示唆してくれるのではないかと思いますのです。

63 回生諸君の高校生活は、その半分以上がコロナ禍に翻弄されたものでした。幹部学年でのクラブの合宿など、できずに終わったものも多かったと思います。それでも、文化祭、修学旅行、そして体育祭において、厳しい制約の中で何とか実施にこぎつけることができたのは、君たちの業績として高く評価されるべきことです。それらの場面々々には、君たち自身の冷静な判断や創意工夫、そして考えることをやめない意志すなわち情熱がありました。私は、その具体的な一片一片に“すべてがある”と考えます。いずれも本当に難しい状況下の取り組みでしたから、悩み、立ち止まり、逡巡したり迷走したりすることもあったでしょう。しかしそこには、君たちがあくまでも誠実に、必死に足掻いて取り組んだ姿があるのです。さすれば、仮に思い通りの成果が得られずに後悔が残ることがあったとしても、それらの取り組みは、君たちの人格をしっかりと形成するものであったと言えるのではないのでしょうか。それが、私が“すべてがある”と言う所以です。そして、“思い残した”その姿に、共に足掻いた経験を持つ君たちは、互いに共感を覚えているはずです。その共感が作り出す人間関係の中でこそ、人はかけがえのない“ひとり”になっていくことができます。実はこの“ひとり”になっていく過程こそが強いのだと、私は思います。社会を吹き荒れるどんな嵐も受容するしなやかさが、そこには生み出されるのではないかと思います。それは、サリーガーデンの楊の枝のようなしなやかさなのかもしれません。

ここまで考えると、「卒業式」とは、青春という、むしろ暗く、迷いに満ちた時代を共に歩んだ者たちが集い、少しのためらいを感じながら“ひとり”になって巣立っていくのを、共感をもって確認し合う儀式なのではないかと思えてきます。

現代は多様性の時代と言われますが、多様性の受容は不安を伴うものです。それだけに、強く言い切る言説を操る人が現れると、人々はつい惹かれてしまうのではないかと思います。その結果、とても多様性を受け入れているとは言いがたい状況が作り出されていきます。先ほどは、先行き不透明な不安な時代と述べましたが、まさに今現在の戦禍に巻き込まれつつある世界状況が思われてきます。そこで、自らの中の、“思い残した感覚”を大事にしたいと強く思うのです。様々な異なる背景をもった他者への寛容を得るために、“思い残した感覚”への共感を呼び起こしたいものです。

さらに言えば、“思い残した感覚”は、人々が人生のページを刻んできたそれぞれの土地に、独特の“風土”を作り出します。そして、世界には様々な“風土”が生まれていき、それが豊かな多様性を生み出していきます。君たちの思いが残っている駒場東邦にも個性あふれる“風土”があり、君たちがそれを育ててきたように、これからも後輩諸君が大事に受け継いでいくのだと思います。

残念ながら、世界ではこれからも強く言い切る言説が我が物顔で語られる予感がするのですが、その中であって、互いに離れていたとしても、駒場東邦の日々を通して醸成された“共感”は、いつでも君たちの中にあると思っていてほしいと切に願います。

最後になりましたが、ここまでご息方を慈しみ育てていらっしゃる保護者の皆さまへ、改めて心よりお祝いを申し上げますとともに、この六年間に賜りました本校教育活動への並々ならぬご理解とご協力に、厚く御礼を申し上げます。誠にありがとうございました。

63 回生諸君の大いなるご活躍を、共に楽しみにしていきたいものです。

以上をもちまして、本日の式辞といたします。

令和4（2022）年3月7日

駒場東邦中学校・高等学校

校長 小家 一彦